

銭形平次打明け話

野村胡堂

青空文庫

昭和六年のある春の日の午後のことである、かねて顔見知りで、同じ鎌倉に住んでいる菅忠雄君^{すがただお}が、その当時報知新聞記者であった私を訪ねて来て、二階の応接間でこう話したのである。

「今度オール読物を月刊雑誌にすることになったが、その初号から岡本綺堂さんの捕物帳のようなものを連載したいと思うがどうだろう、君にそんなものは書けないか」というのである。岡本綺堂さんは『修禅寺物語』^{しゆぜんじ}の作者であるばかりでなく、捕物帳にもすぐれた江戸情緒を盛って、われわれ後生の及び難い才分を示した人ではあるが、私にはまた、私の考え方があるかも知れず、

「岡本先生の真似^{まね}は出来ないが、私はまた私の書き方があるかも

知れない」と、簡単に引受け、銭形平次は、その月から、連載読切として出発し、五十回前後で半歳ばかり休んだ外は、戦争中の休刊を別に、まずまず今日まで続けて来たのである、その間二十五年間、約三百回に及び、新聞その他、他誌の発表を加えて、三百頁五十巻（注・まだ定本にならぬ前の別の本）という、驚くべき大量となったのである。

最初私は、同心、与力または御奉行であつてはいけない、最初から江戸の市民でなくてはいけず、シャーロック・ホームズのように、自由でなければいかず、もう一つ、特殊の技能を持った、英雄人でなければいけないと思つたのが、銭形平次を作り出した動機であるとも言えるだろう。四文銭を投^{ほう}らせたのは、第一回か

らの特技で、これは『水滸伝』のぼつうせんちようせい没羽箭張清が、腰に下げた錦の袋を探って石を投るのと同じ型の思い付きに過ぎない、毛もうり利げんたつ玄達ふきやの吹矢、八丁礮つぶての喜平次の礮、古来作家は屡々しばしばこの手を用い、放送や映画などになると、近頃はいっこうに銭を投らせないではないか、などとお客様に叱られたほど、これが通俗になつてしまい、いささか作者を閉口させている次第である。

しかし作者の意図は別にあるわけで、今日はそのことについて少しくお話しようと思う。一体私は東北の僻村へきそんの出で、祖先の名は、源九郎義経とも平清盛とも伝わらず、元禄時代からの墓碑ぼひも残っているが、全くの水呑み百姓である、祖先のお蔭で中農程度の土地は持っていたが、士族が通れば、道の一隅に避けて、丁

寧にお辞儀して通つた百姓の子である。明治初年に生れて、十年代に成人し、封建思想が村の隅々まで残つていた私の少年時代に、われわれを虐げ^{しいた}尽した階級を悪^{にく}み、庶民に同情しようと思ひ定めたことはまた已むを得ない。

捕物帳という、かりそめの仕事をするに當つて、この初一念が、私を鼓舞^{こぶ}したことも考えられないではない。侍階級でも随分立派な人はないわけではなく、中には驚くべき清^{せい}廉^{れん}な君子人も少なくはなかつたが、それは物心ついてから、私が掘り出したことで、その例を以て侍階級の一般を律するわけに行かず、私の少年の頃の憎悪は、依然として徒食する人達や、駄^だ馬^ばの背から、飛降りて道を避けさせた人達に向けられたことは言うまでもない。

私の書いた、三百七、八十篇の銭形平次を丁寧に読んで下すつた人は、すでに気がついておられたことであろうが、私は大した意識もなしに、侍階級に対する反抗を企てていたのである。三百年前の槍一筋の手柄を言い立てて、子孫代々徒食する不合理さは、至るところに指摘してあつたと思う。史を調べるまでもなく、私の祖先の幾人かは天保期の南部藩の有名な百姓一揆に加わり、殿様に反抗して、仙台藩の仲介までも煩^{わづら}わし、その記録は、私の書庫にも残っており、私が子供の頃故老からも親しく聴かされたものである。それは早くも時代を距^{へだ}て世紀を変えて、今は昔物語に過ぎない。私の弟は今以て祖先の土地を守り、裕福に暮しているのである。私が百年前の階級制度を鳴らしたところで、一向に詰

らない話である。

捕物帳に反抗精神があると言われたのは、探偵評論家の白石潔きよしであつたと思う。今の人は百姓一揆も知らず、天馬、手振りの賦ふ役えきの激しさも知らないが、明治生れの私には、人ごとならず実感を伴うのである。平次が江戸の風物を愛しながら、一脈の反骨を蓄えるのは、こういった私の経験に根ざすものがあるのであるまいか。

だがしかし、平次の成功は八五郎の成功だとも言えるのである、この大長篇に八五郎という者が出なかつたら、なんと淋しいことであろう。正直で魯鈍ろどんで、いささか惚れっぽくて、足の達者な八五郎は、銭形平次にとっては申分のない相手でもあり、助手でも

あつたのである。八五郎の登場は、連作物平次の第三話あたりのように思うが、八五郎の発見は、平次を書き続けさしたとも言えるのである。八五郎を以て代表する江戸ツ子は何んと多いことか。

落語に出て来る熊公、八公、芝居の仕出し、おびただ夥しい野次馬族、

すべてが八五郎族であり、少しの英雄素質のない存在であり、少しの才分も天才もない、平凡そのものの存在である。近頃ある評者が、八五郎が段々賢くなると言っている、賢くない人間を、三十年代賢くないままに描くということは、なかなか容易ならぬわざである、あるいはまた、近頃は八五郎の方がより江戸ツ子になり、平次の方が遥かにフェミニストになったと言っている。

長く書き続けている間にそんなことになったのかも知れない、

私自身は決してそんな積りではなく、八五郎を道化役者にする積りなど、毛頭あるわけではない、ただ、正直で勤勉で、邪念じゃねんがなく、職業意識だけを身につける、八五郎という人間を考えたに過ぎない。

もう一つ私は長い間新聞記者をしていたために（明治の末から太平洋戦まで）、骨の髄まで新聞社の空気が沁しみこみ、平次と八五郎が、新聞記者になつていたかも知れないのである。江戸の岡っ引が、実際平次や八五郎のようなものではなく、明治の新聞記者が実際は平次や八五郎に似ているかも知れないのである、親子には違いないが、小父さんの書く平次と八五郎は、新聞社の部長と部員のようだ、——とこれは、若い新聞記者の言つた言葉

である。二十五年の長い間、平次と八五郎を、新聞社の編集局の同僚のように書いて来たかも知れないのである。新聞社に三十年も住んで一つも新聞記者小説を書けなかった私が、思わぬところで馬脚^{ばきやく}を出したわけである。

人は何時^{いつ}の世にも、大岡裁きを喜ぶものである、子争いに始まつて、石地蔵をお白洲^{しろす}に引出す興味、三方一両損の論理、皮剥ぎ^{かわは}獄門のトリックは、何時になっても変らない興味である。旧約

（聖書）の昔からソロモンの伝説があり、大岡越前守は未だに天下の名判官で通っている。われわれは法治国の国民であり、坐作^{ざさ}進退ことごとく法によって縛られているに拘わらず、法の外の法を楽しむものとしていのである。信賞必罰は結構なことであるに

違いないが、実際の世の中は、もう少し融通のきいた、知謀を以て裁いてもらいたいものである。

法は冷たく厳しい、ジャン・バルジャンは、かかるが故に生涯をかけて、追ひ廻されたのである。

木鼠小僧はやはり許してもらいたいのである。それは読者心理である。捕物小説はこうして生れ、こうして発達した、捕物小説の世界では、偽善者は深酷に罰せられるが、木鼠小僧は大手を振つてのさばり返っている。大岡裁きはこの世界では、生きて通用する。

江戸という世界は、決して良い世界ではなかったかも知れない、侍階級は威張り返り情実に依つて物事が運ばれ、賄賂は公行したわいろ。

に相違なく、各所にボスが幅をきかし、あらゆる進歩は止まったことであろう。それは良い世界ではないが、時を隔てて^{へだ}考えると、まことに良い時代だったとも言えるのである。ここには幡随院の長兵衛が生きており、式亭三馬や十返舎一九も生存し、鼠小僧次郎吉も、弁天小僧菊之助も、生きていたに違いない、人間は寡欲^{かよく}で恬淡^{てんたん}で、時には途方もない物堅い人間が生存していたに違いない、随分苦しい生活であつたが、猫の蚤^{のみ}を捕えても暮しが立ち、耳の穴を掃除しても三度の飯にありついたのである。

今の世の中、汚職という字が新聞から消える間もない世界とは、なんという違いであろう、人々が暮し好かつた昔の時代を恋しくなるのも、また已むを得ないことではあるまいか。

捕物小説は季きの文学だと言われている。捕物小説と限らず、日本のあらゆる芸術は、季の芸術であると言えないことはあるまい、和歌、俳句、ざっばい雑俳、音曲から美術にいたるまで、季感の支配を受け
ないものは一つもないとも言えるのである。

宗祖岡本綺堂先生は、この点に眼を注がれ、作物の中に、季感と江戸の年中行事を取り入れて、『半七捕物帳』の成功を生んだと言えるのである、試みに六十余篇の遺作のうち一つを読んだだけでも、紙面にあふるる季感に、読者万人は打たれずにはいないだろう。われわれ後生はその遺風を学んで、岡本先生の域に達しないのは、時代の違いであり、年齢の違いであり、更にまた天分の違いであると申すの外はない。

この季感の採り入れは、岡本先生の成功であるばかりでなく、われわれ後生をして及び難しの感を抱かせる原因である、名著『江戸に就ての話』を生んだ岡本先生は、まことに及び難き篤とくが学くでもあつたのである、間違つてはいけないがそれは単なる知識の量ではなく、これ进行处理した、岡本先生の詩人的要素でもある。作者としての働きでもあつたのである。

季感の処理の次に、私は矢張り知識の量を挙げなければならぬ、あらゆる作物は、夥しい知識の量を必要とするが、捕物小説もその例にもれず、潜在的に博識でなければならないのである、少なくとも外国の新しい探偵物語には、精通していた方が宜よろしい。この意味に於て、コナン・ドイルは經典的で、遡さかのぼ上あつてポーや、

近頃アメリカで騒がれている、新人の作物も一通りは知っていた方が宜しい。

私はかつて、弱電氣に感電死を書いて得々としていた事があるが、同じ月の或る雑誌に小酒井不木氏の同じ弱電氣死を扱ったのを発見して、胆きもをつぶした事がある、すべての物を読むのは、人間業として出来ないことであるが、少なくとも「赤髪組合」や「まだらの紐」は出来るだけ避けなければならない。

私は筋立てに行きづまると、かつてコナン・ドイルを読んだものである。オルツイ夫人は思いの外役に立つ、あのトリックをそのまま利用しては困るが、逆または反対に利用することは出来るわけである、私はかつて「十二の刺傷」の一部を利用して、筋は

全く違っているのであるが、探偵作家の某氏に指摘されて弱ったことがある。

新人の例えばクイーンなどのものは、理窟が多くて、筋が複雑で、あまり役には立たない、それよりは、コリンズ以前の古典探偵小説の方が面白かろうと思う、但し読者も多いことだから、そのまま筋やトリックを利用してはいけない。

とういんひじ 棠陰比事、おういんひじ 桜陰比事といった、比事物の古書は案外役に立つ、

私は盛んに利用するが、種の出所を必ず明記しているので、かつて文句は来たことはない。焼跡から人の死体を発見した、口中に灰があれば焼死で、灰がなければ他殺死体つまり死後に火を放つたものと比事に載っているが、私はその話を利用して死体の口中

に灰を押込んだことを書いている、口中に灰を押込んだが、鼻の穴には押込まなかつたという落ちである。これも比事から得た材料の一つである。

豆まめつぶ粒を敷居の溝に置いて、夜中に人が出入りすれば豆は独りでに動くという話である、その敷居の上の豆をわざわざ動かして、反証を作つたと書いたこともある、これも比事物から得た材料である。

この種の材料には皆出所を書いて置いた筈はずであるが、比事物から少なくとも十個の材料を得た筈である。

桜陰比事は井原西鶴の作と言われるが、名文であるに相違ないとしても、棠陰比事ほどの材料はないようである。

物識り顔をする人間を私は好きになれないが、本当の専門家の話には、思いもよらぬ好材料が潜んでいることがある、私は一日えきろ駅路の研究者に逢つて、その講演を聴き思いも寄らぬ材料を二つ得たことがある。一つは田舎の出来事だが、主殺しの町人は三属まで死刑にされたという例が二つ、もう一つは、田舎の遊女つまり飯盛り女郎は自殺や相對死を防ぐために、不自然死の場合それが、己意に出たとわかると、親許に身のしろ金を弁償させたということである。

昔の法令には如何にもいかに残ざんぎやく虐なものが多かつたようである。

一と昔前は、青酸加里と明記することさえ禁じられた時代がある、その頃の小説はいかに間の抜けたものであつたか私が改めて

書くまでもあるまい、小説にまたは新聞に青酸加里という文字を使わなかつたところで、青酸加里の自殺や犯罪は滅つたわけではなく、うしのこくまい丑刻詣りが唯一の殺人方法であつたわけではない、随分可笑おかしな話である。

私は毒物として、もつぱらたまぜり玉芹を使った時代がある、玉芹の毒に中あてられて、友人の夫人が暴死したからである。世の中には私共の考えも及ばない毒物も存在するのである、近頃は時々とりか鳥ぶと兜を用いるが、その毒性は詳しいことがわかつているわけではなく、馬酔木あしびも時々用いたが、そんな大した毒性はないと植物学者から聴いていささかがつかりしたところである。

馬酔木を嘗なめて馬がひよろひよるになる図などはなかなか面

白いが、そんなわけには行かぬものらしい。

これを要するに私はフトしたことが機縁となつて、銭形平次三百八十何篇五十巻始め、池田大助十巻外幾つかの捕物小説を書いてしまった、今更百の悔も及ばない。しかしこういうことを考えている、何時いつの時代を舞台にして、如何いかなる小説を描こうと、結局は何らかの形で現生活と結び付かないものはあり得ない。

百の『ドン・キホーテ』を描こうと、千の『ダルタニアン』を描こうと、それは大した変りはないということである、それでよろしいのである、われわれは現代以外の生活を経験しないからである。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十三）青い帯」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物全集第二六卷」河出書房新社

1958（昭和33）年

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2015年9月1日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<https://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次打明け話

野村胡堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>